



Risk Flash No.18 (Vol.2 No4)

発行：滋賀大学経済学部附属リスク研究センター
発行責任者：リスク研究センター長 久保英也
〒522-8522 滋賀県彦根市馬場1-1-1
TEL:0749-27-1404 FAX:0749-27-1189
e-mail: risk@biwako.shiga-u.ac.jp
Web page: <http://www.econ.shiga-u.ac.jp/main.cgi?c=10/2>

●社会システムの視点	Page 1
●今週の論文紹介：「三方よし」と「陰徳善事」	Page 2
●教員紹介：有馬敏則・リスク研究センター通信	Page 3

社会システムの視点

システムとりわけ生命をもったシステムにとって、最大の「リスク」は何と言っても「死」ということになるでしょう。さまざまなリスクの行き着くところ、結局は自らの滅亡つまり死ということになるからです。生物や社会などの「生命系」にとっては、「死」をどう回避するか、そしてあわよくば何とか、「永遠の生命・繁栄（不老不死）」を手にすることが、究極の課題だと言うことも出来るでしょう。

社会システムが崩壊するという事態（つまり「社会の死」）に興味をもち、同じ生命系として生物体の場合はどうなんだろうと、最新の生物学理論（「複雑系生命論」！）を読んでみてびっくりしました。なんと「死ぬ」ことは、生物が進化の過程で新たに獲得した能力だということです！どうも「死」の中にも、受動的・消極的な汚い死（ネクローシス）と能動的・積極的な綺麗な死（アポトーシス）の二つがあるらしくて、後者は生物の獲得した「能力」らしいのです。存続のために、バクテリアのように無限に分裂を繰り返して自らのコピーを増やし続けるという、暴走車の数量戦術をとっていた初期生物が、加速度的な資源消費による飢餓という自己矛盾に直面して、この暴走を止めるために獲得した新たな「ブレーキ」こそが、自ら「死ぬ」能力（アポトーシス）だというわけです。

社会システム学科特任教授 すずきまさひと 鈴木正仁
具体的に言えば、無限に増殖するという「生」だけしかない単細胞生物的な世界（無性生殖）から、多細胞生物の有性生殖を通じて世代から世代へ、受精と自らの死によって生命の連続とその進化を図る世界へと、親の「死」と子の「生」を巧妙に組み合わせることが一つ。いま一つは、受精卵から出発して個体が形態形成を行なう過程で、細胞分裂の「停止」や細胞の「予定死」を組み込むことで、一定の形と大きさをもった個体の形成を可能にしたこと（おたまじゃくしが蛙に変態する過程のしっぽの消失がその典型！）。いずれも、「より良き生」を目指して、細胞や個体の死という形で生命の暴走を抑えるべく、「生」に組み込まれた「ブレーキ」機構だと言えるでしょう（このブレーキが壊れたのが「癌」！）。

このように、生物体はその最大のシステム・クライシスとも言える「死」に対しても、単にそれを回避するという方向に対処するだけでなく、「死」のもつ機能を逆手にとって、むしろそれを「より良き生」のために利用してさえいるのです。生命がもつ、なんとというしなやかさとしたたかさ！そして同じ「生命系」として、社会システムにも同じく、「より良き生」のために組み込まれた「死」の機構がある筈だと思えるのですが…。

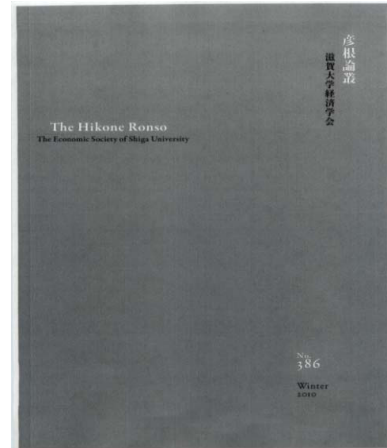
今週の論文紹介

「三方よし」と「陰徳善事」

著者：ファイナンス学科教授 ありまとしのり 有馬敏則
収録：彦根論叢 No. 386:2010 winter、pp.118-130

概要： 先行き不透明な世界経済情勢や本年3月11日に発生した東日本大震災の状況下で、信念をもってこれからの難局に立ち向かうためには、先人の確固とした知恵や倫理の再評価が、今ほど必要な時は無いと思います。とくに本学の前身彦根高等商業学校から現在まで80年以上研究が続けられている近江商人研究は、日本の商業史のパイオニアと位置づけられており、その研究には、注目度が高まっているCSR（Corporate Social Responsibility, 企業の社会的責任）の原点と位置付けられる「三方よし（売り手よし、買い手よし、世間よし）」や、功利的でなく密かに良い事を行わせてもらう「陰徳善事」も含まれています。

本稿においては、近江商人の定義、近江商人の出身地と出店の分布状況、近江商人の取り扱い品目、現在に生きる近江商人の例、滋賀大での近江商人研究の歴史、近江商人の行動規範の根底にある宗教観と「御先祖様」、近江商人の「家訓や店則」にみる宗教観、近江商人の「三方よし」の原典とこの言葉を造語した本学名誉教授小倉栄一郎氏の功績、「三方よし」とCSRとの関連、近江商人の「陰徳善事」と初代中井源左衛門の「金持商人一枚起請文（本学部附属史料館蔵）」の検討、二種類の金持と「陰徳善事」との関連、「始末とシワイ＝ケチ」の違いについて考察しています。



著者のつぶやき

近江商人は、他国進出時に十分なマーケットリサーチを行ってリスクを低下させると共に、「乗り合い商い」により、少ない自己資本を補いつつ、投資のリスク分散を図る等「リスクマネジメント」にも優れていたと言えます。また進出先地域に受け入れられるために「三方よし」の精神が出てきたのではないのでしょうか。そして、いったん天災地変が起きたときは、全財産を使って救済にあたった近江商人の「陰徳善事」の事例は、現在の大震災でも大いに示唆に富んでいると思います。

本学の「リスク管理に長けた近江商人研究」を文部科学省が評価し、本学大学院経済学研究科博士後期課程に、社会科学系としては日本初の「経済経営リスク専攻」が平成15年4月に新設されたのは、設立準備に係わった者として喜びに耐えられません。今後とも大学院、リスク研究センター、史料館、経済経営研究所等々が有機的に協力して、より一層の教育研究の充実を図り、近江商人研究を含めたリスクの一大研究拠点としての滋賀大の地位を確立するよう努力したいと思います。

教員紹介「有馬敏則」

1973年4月に本学の助手に任用されて以来、2011年4月で滋賀大学在職39年目になります。私の研究テーマは基本的に国際金融論、金融経済論、金融機関論、金融リスク論ですが、その時々で研究の焦点が変化しています。

①助手着任当時はスミソニアン体制が崩壊し、主要国が変動相場に移行し、「国際通貨ドル」の地位も揺らぎ、先行き不透明さが増していました。そこで大学院時代からのテーマであった「国際通貨発行特権 (International Seigniorage)」の観点から、ドルが国際通貨であることによる費用・便益分析、国際通貨制度改革と公平な国際通貨発行特権による利益の配分、変動相場制下の金融政策の波及過程等について研究しました。そして『国際通貨発行特権と国際通貨制度』（研究叢書第5号、1979年）、『国際金融政策と国際通貨制度改革』（科研報告書、1980年）を公開し、科学研究費補助金研究成果刊行費により『国際通貨発行特権の史的研究』（日本学術振興会、1984年）を出版したのが博士論文となり、翌年、神戸大学より経済学博士号が授与されました。

②1985年のプラザ合意以降の急激な円高の中で、日米経済摩擦によるアメリカの

対日強行圧力を緩和するために設置された「前川レポート」が1986年4月に公表され、私も同年5月～6月に



ありまとしのり
ファイナンス学科教授 有馬敏則

かけてアメリカ政府の招待により、「日本の金融資本市場の国際化と日米貿易摩擦解消についての討議」の機会がアメリカ国内で数多くあり、このときの内容を『内外金融システムの変化と対外不均衡』（研究叢書第14号、1987年）として公開しました。

③2001年9月の「世界同時多発テロ」により、私はリスクの重要性を痛感し、これが本学大学院博士後期課程「経済経営リスク専攻」のコンセプトになりました。そして『グローバル経済下の内外金融のリスク管理』（研究叢書第36号、2002年）を公開しました。

今後も「不確実性下の内外金融経済のリスク管理」について研究をしたいと思えます。

リスク研究センター通信

陵水会リレー講義のご紹介（第4回）

秋学期に行われました陵水会リレー講義についてのご紹介の最終回です。今回は、（財）損害保険事業総合研究所 専務理事の濱筆治氏（大19）にご登場頂きます。11月25日に行われました講演のテーマは、

『「滋大卒は優秀な下士官になれても士官には・・・はホントか？」』でした。

濱様から頂いた講演内容は以下の通りです。

くぼひでや
(文責 久保英也)

『先ず映画「Justice」を題材に、士官の心構えとして「Honor」「Encourage」「Duty」「Sacrifice」の4つを挙げる。一方「下士官」の典型例に軍曹を挙げ説明。

その後、各自が自らの問題として：「卒業して何になる」→「リーダーになって何をやる」→「リーダーとフォロワー」→「そ

のためには何をしたらよい」→「Hotな心、Coolな知恵」→「組織に属さない名もない士官もある」等の理解に進む。最後に「なりたければなれる、何にでも。そのためには自覚と努力が必要」「大きなテーマを巡って学友と論議し、骨太な思考力を！」で結ぶ。』

「リスクフラッシュご利用上の注意事項」

本規約は、滋賀大学経済学部附属リスク研究センター（以下、リスク研究センター）が配信する週刊情報誌「リスクフラッシュ」を購読希望される方および購読登録を行った方に適用されるものとします。

【サービスの提供】

1. 本サービスのご利用は無料ですが、ご利用に際しての通信料等は登録者のご負担となります。
2. 登録、登録の変更、配信停止はご自身で行ってください。

【サービスの変更・中止・登録削除】

1. 本サービスは、リスク研究センターの都合により登録者への通知なしに内容の変更・中止、運用の変更や中止を行うことがあります。
2. 電子メールを配信した際、メールアドレスに誤りがある、メールボックスの容量が一杯になっている、登録アドレスが認識できない等の状況にあった場合は、リスク研究センターの判断により、登録者への通知なしに登録を削除できるものとします。

【個人情報等】

1. 滋賀大学では、独立行政法人等の保有する個人情報の保護に関する法律（平成15年5月30日法律第59号）に基づき、「国立大学法人滋賀大学個人情報保護規則」を定め、滋賀大学が保有する個人情報の適正な取扱いを行うための措置を講じています。
2. 本サービスのアクセス情報などを統計的に処理して公表することがあります。

【免責事項】

1. 配信メールが回線上的の問題（メールの遅延、消失）等によりお手元に届かなかった場合の再送はいたしません。
2. 登録者が当該の週刊情報誌で得た情報に基づいて被ったいかなる損害については、一切の責任を登録者が負うものとします。
3. リスク研究センターは、登録者が本注意事項に違反した場合、あるいはその恐れがあると判断した場合、登録者へ事前に通告・催告することなく、ただちに登録者の本サービスの利用を終了させることができるものとします。

【著作権】

1. 本週刊情報誌の全文を転送される場合は、許可は不要です。一部を転載・配信、或いは修正・改変してblog等への掲載を希望される方は、事前に下記へお問い合わせください。

— *尚、最新の本注意事項はリスク研究センターのホームページに掲載いたしますので、随時ご確認願います。

(<http://www.econ.shiga-u.ac.jp/main.cgi?c=10/2/3/12>)

*当リスクフラッシュをご覧頂いて、関心のある論文等ございましたら、下記事務局までメールでお問い合わせください。

発行：滋賀大学経済学部附属リスク研究センター
編集委員：ロバート・アスピノール、金秉基、久保英也、
澤木聖子、得田雅章、弘中史子、宮西賢次
滋賀大学経済学部附属リスク研究センター事務局
(Office Hours: 月一金 10:00-17:00)
〒522-8522 滋賀県彦根市馬場 1-1-1
TEL:0749-27-1404 FAX:0749-27-1189
e-mail: risk@biwako.shiga-u.ac.jp
Web page: <http://www.econ.shiga-u.ac.jp/main.cgi?c=10/2>